

【D年】聖霊降臨節第11主日(2024年7月28日)

【旧約聖書日課】箴言 9章1～11節

- 1 知恵は家を建て、七本の柱を刻んで立てた。
- 2 獣を屠り、酒を調合し、食卓を整え
- 3 はしためを町の高い所に遣わして
呼びかけさせた。
- 4 「浅はかな者はだれでも立ち寄るがよい。」
意志の弱い者にはこう言った。
- 5 「わたしのパンを食べ
わたしが調合した酒を飲むがよい
- 6 浅はかさを捨て、命を得るために
分別の道を進むために。」
- 7 不遜な者を諭しても侮られるだけだ。
神に逆らう者を戒めても自分が傷を負うだけだ。
- 8 不遜な者を叱るな、彼はあなたを憎むであろう。
知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
- 9 知恵ある人に与えれば、彼は知恵を増す。
神に従う人に知恵を与えれば、彼は説得力を増す。
- 10 主を畏れることは知恵の初め
聖なる方を知ることは分別の初め。
- 11 わたしによって、あなたの命の日々も
その年月も増す。

【使徒書日課】

コリントの信徒への手紙一 11章23～29節

²³わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、²⁴感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。²⁵また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。²⁶だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

²⁷従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。²⁸だれでも、自分をよく確かめたうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。²⁹主の体のことをわきまえずに飲み食いする者は、自分自身に対する裁きを飲み食いしているのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 6章41～59節

⁴¹ユダヤ人たちは、イエスが「わたしは天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやき始め、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『わたしは天から降って来た』などと言うのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴わたしをお遣わしになった父が引き寄せてくださらなければ、だれもわたしのもとへ来ることはできない。わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に、『彼らは皆、神によって教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、わたしのもとに来る。⁴⁶父を見た者は一人もない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷はっきり言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸わたしは命のパンである。⁴⁹あなたたちの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹わたしは、天から降って来た生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。」

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に食べさせることができるのか」と、互いに激しく議論し始めた。⁵³イエスは言われた。「はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。⁵⁴わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。⁵⁵わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。⁵⁶わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。⁵⁷生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。⁵⁸これは天から降って来たパンである。先祖が食べたのに死んでしまったようなものとは違う。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

箴言 9章1～11節

- 1 知恵は自ら家を建て
七本の柱を刻んだ。
- 2 いけにえを屠り、ぶどう酒を調合し
さらに食卓を整え
- 3 若い娘たちを町の高き所に遣わして
呼びかけさせた。
- 4 「思慮なき者は誰でもこちらに来なさい。」
浅はかな者にはこう言った。
- 5 「来て私のパンを食べ
私が調合したぶどう酒を飲むがよい
- 6 思慮のない業を捨て、生きよ。
分別の道を進み行け。」
- 7 嘲る者を諭す者は屈辱を受け
悪しき者を懲らしめる者は自ら傷を受ける。
- 8 嘲る者を懲らしめるな、彼に憎まれないために。
知恵ある人を叱れ、彼はあなたを愛するであろう。
- 9 知恵ある人に与えよ、彼は知恵をさらに得る。
正しき人に知らせよ、彼は判断力を加える。
- 10 主を畏れることは知恵の初め
聖なる方を知ることが分別。
- 11 私によって、あなたの日は増し
あなたの命の歳月は加わる。

コリントの信徒への手紙一 11章23～29節

²³私があなたがたに伝えたことは、私自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、²⁴感謝の祈りを献げてそれを裂き、言われました。「これは、あなたがたのための私の体である。私の記念としてこのように行いなさい。」²⁵食事の後、杯も同じようにして言われました。「この杯は、私の血による新しい契約である。飲む度に、私の記念としてこれを行いなさい。」²⁶だから、あなたがたは、このパンを食べ、この杯を飲む度に、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

²⁷従って、ふさわしくないしかたで、主のパンを食べ、主の杯を飲む者は、主の体と血に対して罪を犯すこととなります。²⁸人は自分を吟味したうえで、そのパンを食べ、その杯から飲むべきです。²⁹主の体をわきまえないで食べて飲む者は、自分に対する裁きを受けて飲むことになるのです。

ヨハネによる福音書 6章41～59節

⁴¹ユダヤ人たちは、イエスが「私は天から降って来たパンである」と言われたので、イエスのことをつぶやいて、⁴²こう言った。「これはヨセフの息子のイエスではないか。我々はその父も母も知っている。どうして今、『私は天から降って来た』などと言うのか。」⁴³イエスは答えて言われた。「つぶやき合うのはやめなさい。⁴⁴私をお遣わしになった父が引き寄せてくださなければ、誰も私のもとに来ることはできない。私はその人を終わりの日に復活させる。⁴⁵預言者の書に、『彼らは皆、神に教えられる』と書いてある。父から聞いて学んだ者は皆、私のもとに来る。⁴⁶父を見た者は一人もいない。神のもとから来た者だけが父を見たのである。⁴⁷よくよく言うておく。信じる者は永遠の命を得ている。⁴⁸私は命のパンである。⁴⁹あなたがたの先祖は荒野でマナを食べたが、死んでしまった。⁵⁰しかし、これは、天から降って来たパンであり、これを食べる者は死なない。⁵¹私は、天から降って来た生けるパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。私が与えるパンは、世を生かすために与える私の肉である。」

⁵²それで、ユダヤ人たちは、「どうしてこの人は自分の肉を我々に与えて食べさせることができるのか」と言って、互いに議論し合った。⁵³イエスは言われた。「よくよく言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたがたの内に命はない。⁵⁴私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、私はその人を終わりの日に復活させる。⁵⁵私の肉はまことの食べ物、私の血はまことの飲み物だからである。⁵⁶私の肉を食べ、私の血を飲む者は、私の内にとどまり、私もまたその人の内にとどまる。⁵⁷生ける父が私をお遣わしになり、私が父によって生きるように、私を食べる者も私によって生きる。⁵⁸これは天から降って来たパンである。先祖たちが食べたが死んでしまったようなものではない。このパンを食べる者は永遠に生きる。」⁵⁹これらは、イエスがカファルナウムの会堂で教えていたときに話されたことである。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・7月28日「聖霊降臨節第11主日」の日課主題は「聖餐」。

・旧約聖書日課は、「箴言」から知恵の勧めが告げられる箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙一」から、「主の晩餐」の制定についての伝承を確認して記す箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、「パンの教え」の後半の箇所。

旧約日課(箴言9章より)

・「箴言」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「諸書(ケトゥビム)の中で「エメット」の呼称でまとめられる詩文学文書の一つ。「エメット」は、「ヨブ記(イオブ)」「箴言(ミシュレエ)」「詩編(テヘレム)」の頭文字を取った呼称。ユダヤ教のラビ伝承に拠れば、ユダヤ正典(旧約聖書)の枠組みは、前3世紀までにエズラの伝統を継承する者たちの会議体(「クセネト・ハ・グドラー」、「大協議体」などと訳される)によっていったん確定されたが、その後も「サンヘドリン」で議論が続き、「口伝律法」の有効性を巡る議論から「成文律法」としての「正典」各書の正典性にも繰り返し疑義が出され続け、ようやく「正典」の枠組みについて確定的な結論が得られたのは紀元後1世紀末ごろのこと、とされている。これら一連の正典性を巡る議論の中で、「箴言」は繰り返し正典性に疑義が出されたとされている。伝承に拠ると、初期には「雅歌」や「コヘレトの言葉」と共に「箴言」が譬えて語られていることが聖書にふさわしくないとされ、後期には「箴言」の教えが相互に矛盾する内容を含んでいるという理由で忌避された。しかし、最終的に、「口伝律法」を広範に認めるファリサイ派系ラビたちの主張によって、「箴言」は正典(成文律法)にとどめられたとされる。

・「箴言」の書名は、冒頭の標題「イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言」に基づく。「箴言」と訳されるヘブライ語「ミシュレエ」<「マーシャル」の原義は「類似／比例」などを意味し、「格言(箴言)」のほか「歌／託宣／たとえ／ことわざ」など多義的に訳される。他方で、「箴言」中には「知恵(ホフマー)」という語が特徴的に用いられ(1:7など)、「箴言」の用語は、この「知恵」を示す言葉として特異的に用いられていると考えられる。この「知恵」の言葉である「箴言」を語る者は、「賢者」を指しているとも言われるが、本書自体は、「賢者」に批判的な言及をしている(26:5,12,16)。

・日課箇所の前半(1~6節)で、「知恵」は、比喩的に人格化されている。「知恵」を人格化した比喩は、新約「ヨハネ福音書」が「ロゴス(言葉)」を比喩的に人格化する表現に類似している(ヨハネ1:1~14)。

・9節「主を畏れることは知恵の初め」は1:7と同じ表現。これを含む後半(7~11節)の「知恵」は、前半とは異なり人格化されていない。

使徒書日課(1コリ11章)

・「コリントの信徒への手紙一」は、「パウロ書簡集」の第二に置かれた書簡文書。パウロが、シリア・アンティオキアの教会から派遣されたバルナバ宣教団を離脱し独自の宣教団を組織して実施したマケドニア伝道(フィリピ、テサロニケなど)の後に向かったコリントでユダヤ人夫妻アキラとプリスキラをはじめとするローマの教会メンバーと協力して立ち上げた教会共同体に宛てて記した一連の書簡の一つ。パウロは、コリントの教会に対して自分が指導者の立場にあると自認しており、実際にコリントのメンバーの中にはパウロの支持者が一定数存在した。しかし、同教会には、ローマの教会とのつながりからペトロ(ケファ)を指導者と仰ぐ者、またアレクサンドリアの教会出身の巡回宣教者アポロを指導者と仰ぐ者など、党派争いがあったとされる(1章)。もっとも、そのような党派争いが実際にあったかどうかは定かでない。実のところ、パウロが自分を指導者と認めない者たちの存在を見て、レッテル貼りをしているだけなのかもしれない。いずれにしても、パウロは、本書簡を著した段階で、コリントの教会の一部の人々との間で意思疎通がうまくできない状態にあったと考えられる。それに対して、パウロは、自分を支持してくれている人々からの相談に答えることから始めて、自分の教えが「使徒」的な教えであるという主張をし、正当性を訴えようとしている。彼自身が「使徒」を名乗る資格があると主張するのは(9章)、その教えが「使徒」を通して「主から受けたこと」であると考えているからである。

・日課箇所は、前段から「主の晩餐」の実践について自分の考えを示す中で、その教えが主イエスご自身の制定された言葉に基づくことを示そうと記したもので、共観福音書の伝える最後の晩餐における「主の晩餐制定伝承」と概ね一致している(マタイ26:26~29、マルコ14:22~25、ルカ22:14~20)。パウロが、このような主の教えの伝承をどれほど使徒らを通して知っていたのかは分からないが、本書簡においては、同様に「主から受けたもの」として教えを述べる例が少なくない一方、そうでない場合には、そうでないことをわざわざ断っている(7:25など)。このような姿勢は、使徒を通して受けた伝承への依存を否定して見せているような「ガラテヤの信徒への手紙」とはまったく異なる。おそらく、「ローマの信徒への手紙」などで最終的に示す包摂的で調停的な姿勢に転じるまでの過程を示すものなのだろう。

・パウロは、ここで、「主の晩餐」(聖餐)の「パンと杯」によって示される「主の体と血」を魔術的、神秘的に理解しているわけではない。パウロはここで、「体と血」を特に区別せずに「主の体」と同一視し、これに対する侮辱があってはならないことを告げているが、後段12章で「体」のたとえで示されるように、彼は、教会論的に理解し、展開しようとしている(11:16,22も参照)。

福音書日課(ヨハネ 6 章より)

・日課箇所は、「パンの教え」の後半部で、「ユダヤ人たちが」の異論に応じる形で教えを展開する構成になっている。なお、「パンの教え」の前半部(6:25~40)では、「群衆」が好意的に問いかけるのに応じる形で教えが展開する構成になっている。

・ここでの「ユダヤ人たちが」の異論は、第一に主イエスの「わたしは天から降って来た」という言説に対するものであり(42 節)、第二に「わたしの肉である命のパンを食べるならば」という言説に対するものである(52 節)。これらの議論は、初期教会内における「主の晩餐」の「パンと杯」をめぐる論争を反映しているとも言われる。すなわち、前者はイエス・キリストの神性・人性に関する論争を、後者は「パンとぶどう酒」という物質の実体変化をめぐる論争を反映しているとされる。これらの議論は、古代教会以来、長く教理論争として続けられてきたものであり、初期教会ですでに論争になっていたという事はありうる。もっとも、前半部からの教えの展開を追うならば、これらの異論は、モーセの出来事の中で語られる「マナ」との類比で比喻として取り上げられる「パン」の意味を、その言説の一部を切り取ることによって曲解してみせているだけであり、「異論のための異論」に過ぎないとも言える。それによって、異論を述べる「ユダヤ人」とそれに同調して主イエスのもとから去って行く「弟子たちの多くの者」(60 節以下)の主張が的外れのものであることを示そうとしているのかもしれない。

・いずれにしても、「パンの教え」で強調されるのは、主イエスの神性・天上性ではなく、むしろ人性・地上性である。これは、「ヨハネ」が他の「共観福音書」の立場との調停を図ろうとした結果であると推認される。

来週の誕生日 (7 月 28 日~8 月 3 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-202「よろこびとさかえに満つ」(= I 53 番「さかえあるいこいの日よ」)は、11-12 世紀フランスの神学者ペトゥルス・アベラルドゥス(ピエール・アベラール)の作詞。彼は、若いころに恋仲であったエロイーズが院長を務める修道院の晩課 *Vespers* のために書き、自身の讃美歌集に収めた。原曲は 17 世紀フランスの歌集に収められた教会旋法の曲で、19 世紀に英国教会の音楽家ヘルモアによって現行の旋律に改められ、広く歌われるように。

・21-513「主は命を」(= I 332)は、19 世紀リバイバル運動の中で生まれた福音唱歌の代表作。作詞者ハヴィガは、父が英国教会司祭で、多くの宗教詩を残した(21-512「主よ、献げます」など)

・21-361「この世はみな」(= I 90 番「ここもかみの」)は、19 世紀末米国長老派牧師モルトビー・D・バブコックの作詞で、原歌詞は 16 節ある。曲は 19-20 世紀米国で教会音楽家として活動したフランクリン・シェファードの作曲とされているが、原曲はイギリス民

謡によるとされている。曲名の「TERRA BEATA」は、ラテン語で「祝福の大地」という意味。

21-202「よろこびとさかえに満つ」

O quanta qualia

1. O quanta, qualia sunt illa sabbata / quae semper celebrat superna curia. / quae fessis requies, quae merces fortibus, / cum erit omnia Deus in omnibus.
2. iere Ierusalem est illa civitas, / cuius pax iugis est, summa iucunditas, / ubi non praevenerit rem desiderium, / nec desiderio minus est praemium.
3. quis rex, quae curia, quale palatium, / quae pax, quae requies, quod illud gaudium, / huius participes exponant gloriam, / si quantum sentiunt, possint exprimere.
4. nostrum est interim mentem erigere / et totis patriam votis appetere, / et ad Ierusalem a Babylonia / post longa regredi tandem exilia.
5. illic molestiis finitis omnibus / securi cantica Sion cantabimus, / et iuges gratias de donis gratiae / beata referet plebs tibi, Domine.
6. illic ex sabbato succedet sabbatum, / perpes laetitia sabbatizantium, / nec ineffabiles cessabunt iubili, / quos decantabimus et nos et angeli.
7. perenni Domino perpes sit gloria, / ex quo sunt, per quem sunt, in quo sunt omnia; / ex quo sunt, Pater est; per quem sunt, Filius; / in quo sunt, Patris et Filii Spiritus.

21-513「主は命を」= I 332

I Gave My Life for Thee

1. I gave My life for thee, / My precious blood I shed, / That thou might'st ransomed be / And quickened from the dead. / I gave My life for thee; / What hast thou given for Me?
2. I spent long years for thee / In weariness and woe / That an eternity / Of joy thou mightest know. / I spent long years for thee; / Hast thou spent one for Me?
3. My Father's home of light, / My rainbow-circled throne, / I left for earthly night, / For wanderings sad and lone. / I left it all for thee; / Hast thou left aught for Me?
4. I suffered much for thee, / More than My tongue may tell, / Of bitterest agony, / To rescue thee from hell. / I suffered much for thee; / What canst thou bear for Me?
5. And I have brought to thee / Down from My home above / Salvation full and free, / My pardon and My love. / Great gifts I brought to thee; / What hast thou brought to Me?
6. Oh, let thy life be given, / Thy years for Me be spent, / World's fetters all be riven, / And joy with suffering blent! / I gave Myself for thee: / Give thou thyself to Me.

21-361「この世はみな」

THIS IS MY FATHER'S WORLD

1. This is my Father's world, / And to my listening ears / All nature sings, and round me rings / The music of the spheres. / This is my Father's world: / I rest me in the thought / Of rocks and trees, of skies and seas; / His hand the wonders wrought.
2. This is my Father's world, / The birds their carols raise, / The morning light, the lily white, / Declare their maker's praise. / This is my Father's world, / He shines in all that's fair; / In the rustling grass I hear him pass; / He speaks to me everywhere.
3. This is my Father's world. / O let me ne'er forget / That though the wrong seems oft so strong, / God is the ruler yet. / This is my Father's world: / why should my heart be sad? / The Lord is King; let the heavens ring! / God reigns; let the earth be glad!